

---

## IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 何回か転生（？）する人の物語

### 【Nコード】

N7031Y

### 【作者名】

起源はきつと厨二病の人

### 【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た！そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残ってみせる！！」と頑張る物語

## ブローグ的な（前書き）

はじめまして起源はきつと厨二病の人です

この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなってしまいましたが暖かい目で見守ってくださいとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんなの〇〇じゃないなどといったものがあると思いますがそれが嫌な人は戻ることをお勧めいたします（汗

それでもよければぜひともご覧ください

## ブローグ的な

皆はよくネットで見るような二次創作のように自分が転生や憑依、トリップをしてみたいと思ったことはあるだろうか？

俺もうらやましいと思っていたが・・・まさか、何処にでもいそうな一般ピーポーの自分が経験するとは思ひもしなかった、、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わリ自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してP S 3を起動し、A C f aを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

くそして現在く

ここに来て（？）から建物内をちよつと調べているとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかった。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

（それにしてもさつきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・？）

などと思っただけでも実際に体に怪我などをしているわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような・・・」

とぼそりとつぶやいた瞬間、ふと勘づき急いで近くのトイレに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

「なんじゃこりゃあああああああああ！！」

（なぜ今まで気づかなかった！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

A C f aを始める リリウムたんマジ可愛いよ テレビからなぞの光が！ 知らない天井だ 俺、若返りました 今ここ

「面倒なことになった・・・」

「悩んでいても仕方ないな、建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前にきた横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィックがある

（なんだ、これは？

映画によく出てくるような手を触れてやるやつかな？

試しに触ってみるか）

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLETEという文字が浮かびどでかい扉が重たい音を立てながら開いた

（なんか開いちゃったよ！）

そしておそろおそろ入っていくとそこにあつたのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものすごく見覚えがあるんだが、まさかな・・・」

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPSS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそう言つとため息をつき、呟いた

「面倒なことになった・・・」

## ブローグ的な（後書き）

最初から駄文ですいません……

これから頑張っていきたいのでよろしくお願いします

## 第1話（前書き）

すいません今回も駄文です；；；

戦闘の描写が下手だったりしてわかりにくいかもしれませんが許してください（汗

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれませんがそこら辺はご了承ください

## 第1話

### 第1話

俺はとりあえずあのAC中に乗ってみることにした

そして不思議なことに身体が覚えているように次々とコクピット内を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とこのACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ

ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ

要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたらしい

なんともまあ良くできたご都合主義なことだ

そう思っているとコクピット内からpipipiと音がする音を聞いたほうをみるとそこには携帯端末らしきものがおいてあり画面には依頼主と書いてあった

(マジかよ・・・)

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思ったのだ

この世界に来たということは戦場にたつかもしれないということ、すなわち死と隣りあわせということである

そう思うと携帯端末にを取ろうとしている自分の手が急に重くなったのだ

実際はその手に何か重いものが乗ったわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さっきAC内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこつちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといっても人殺しは人殺しだ戦場だったからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足掻くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のほうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやっと決心して携帯端末を手に取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？随分と遅いんじゃないか、死んじまったかと思っただけだ  
ガハハ」と相手の男は笑いながら言った

「すまない、少し仮眠をとっていたものでな」

「おいどうした？いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいなんかなかったのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かったただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかったが」

「ああ、気づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、そうだったそうだった」

と男はまるで今思い出したかのように笑った言った

（どうやらこの電話の男とこっちの俺は知りあいようだな）

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつでもどおりのマールに2時間後に来てくれ」

「わかった2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切ったのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあらゆるデータを見ることにした

そして2時間後

彼はマールという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせっていたが携帯端末内に地図もあり看板もでかいためすぐに見つけることができた

（それにしても色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争の最初のほうみたいだな

まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだしな）

そう思っているとこちらに向かってくる身長が2メートルぐらいありそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさっきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言ってきた  
「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそらく携帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容を見た

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰すことであつた

（大企業の兵器開発工場ということはネクストG Aあたりのネクストを作っているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともいえないが）

レイジがそう考えていると

「どうした？何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安でな

敵の新兵器でも出てくるんじゃないかと思っただけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだがゴジマなんちゃらを動力源として動かすACを作っているみたいだ」

「っ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？できたらすぐにお陀仏じゃないか！）

「その新兵器に対しての情報はるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7／8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ」

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい」

「あとほかに不明な点はあるか？」

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらっ」

そっとうとレイジは席を立ち帰ろうとすると男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

とニカツと笑う男に対して自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

というレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家(?)に帰ってきたレイジはすぐさまACのシュミレーターを使い必死に訓練していた

(やはりこの体が本能的に覚えているらしいな・・・)

それにしてもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こうの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・)

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に N I O H 左腕武装に W L O 2 R - S P E C T E R というなんとも微妙なアセンである

(昔の俺は何をしたかったのだろうな・・・)

と内心ため息をつきながらもしっかりとシュミレーターで訓練をしているのであった

あれから数日がすぎ依頼当日

（これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・）

レイジはもう一度依頼内容をしっかりと確認して心を落ち着かせようとしていた

（もうすぐ時間だな・・・）

と思うとコクピットの通信からあの男の声がした

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブーストをふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなっている

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなのが最強の兵器を作ったって宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もつといい素材を渡してほしいもんだ」

と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中中のグレネードを打ち次々に建物の主要施設である場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したところにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWL02R-SPEC T E R をMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まできて扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあった

（後はこいつを破壊すれば終わりか・・・）

と心の中で呟き右腕武装のNIOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

（これで終わりか・・・）

そう思うとレイジは壊滅状態になった工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえってその中には必死に助けてや死にたくないなどと言うものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであったそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた（俺が殺した・・・この手で俺が）

そう思っていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かって銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があった

レイジはとっさに殺されると思い左腕武装のWL02R-SPEC T E R でひたすらに相手を撃った

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」

そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにしていたそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残っておりあの地獄絵図を思い出してしまい急に胃の中のがこみ上げてきて嘔吐してしまった（これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・)

“ 死 ”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった

## 第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいますがお許しを

そういや主人公設定など書いたほうがいいですかね？

## 第2話（前書き）

頑張って投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文；；

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（；）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突っ込まないでください（汗  
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を  
出してみましたか・・・なんというか

## 第2話

### 第2話

あの初（？）の依頼から一週間ぐらいすぎた頃に携帯端末が鳴り響いた

（また、依頼か）

そう思うとレイジは携帯端末を手に取った

「依頼か？」

「ああ、なんと今回は僚機をやとったぞ」

「僚機？」

「ああ伝説のレイヴンだそうだ」

（伝説のレイヴン？まさかLRの主人公か？）

「わかった、依頼内容の受け取りはいつもの場所か？」

「いやすまんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらにメールとして送らせてもらう」

「そうか、珍しいななんかあったのか？」

「いや、いろんな依頼を整理していてなちょっと忙しいだけだ」

「ならいい、無理はするなよ」

「・・・」

「ん？どうした」

「・・・っああ、お前さんこそ珍しいなと思ってな、いつもは心配すらないのに」

「なに、ただの気まぐれさ」

「では後ほど依頼内容を送らせて貰う」

「ああ、頼んだ」

そういうとレイジは携帯端末の通信を切った

依頼主の男side

「ああ、頼んだ」

という言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は

「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末からpipipiと鳴るとレイジは端末を手に取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

（スウェーデンというと北欧のあたりか？）

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見つめる

（なるほどどうやら情報を見る限りLRの主人公みたいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行って合流するでしょう）

そう思うとレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた  
そして自分の僚機になる者に合流をしにいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかったとしても顔を知っておくぐらいはしようと思ったのだ、そして俺がこちらの喫茶店の奥のほうに座って待っていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座っている奥のテーブルの前に行くところだがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

（この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか？）

そう思っていると青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな？」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそっけなく返されたレイジは内心焦ったのだ

（まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな？

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまったかな？）

とレイジが焦っているとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒っているような印象を持たせるとよく言われていたの思い出し

(いつもの悪い癖が出てしまったか・・・)

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを他人に触れてほしくないような気に障ったようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは

「いや、そのことは気にしていない」

こちらこそなんか怒っているみたいなの印象を与えてしまったようだ  
すまない」

とあわてて返してきたのだ。そして二人は互いのその光景に面をく  
らい思わず笑ってしまった

「おっとすまないそういえば俺の自己紹介をしていなかったな、依頼内容のところで知ってると思うが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイヴンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会ってから二日後、作戦開日

「こちらレイジ作戦開始時間となった、戦闘を開始する」

「こちらレイヴン、了解したこちら也开始する」

そう通信するとレイジはブースターで移動をし始めた

（二回目の戦闘だって言うのに前回より心が断然なれてるな、一回でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな）

と思っていると目的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かって背中中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思った瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思いあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

（なっ！まさかネクストだと！？どうしてこんなところに！？）

と思っていると通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまん、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち目はまったく無いと思ってお前らの情報売って安全を保障することにしてもらったんだ」

彼は淡々と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになっているからな、まあ運が悪かったと思ってあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言うと通信は切れて目の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だったなあ、時代遅れの鴉どもめ。このエリートが葬ってやるよ喜べえ！」

ハハハと気がふれてるように笑って言った

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送った

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあれは？」

アイマードコア・ネクスト

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」

「それは本当か？これからどうするんだ？」

「二手に分かれて逃げよう、近くに洞窟があるその付近でACを乗り捨てて逃げるんだ。」

いくらネクストでもそこに入り込まれたら探し出すことはほぼ不可能だ、一緒に逃げてもまとめて殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け」

「そんなことしたらお前がただじゃすまないだろ！？しかも相手は三体いるだろ！」

「まかせろレイヴンが逃げる時間ぐらい稼げるさ、俺のほうがお前よりネクストのことを知っている」

そう言ってもレイヴンは一向に自分だけが生き残ることを選択しようとしないうといたするとレイジは

「いいから早く行け！！お前はこんなところで無様に死ぬのか！？違うだろ？お前は誇り高きレイヴンだろ！なら生きてレイヴンは誇れる存在だと、俺たちのためにも生きてくれ！！」  
それを聞くとレイヴンは

「すまない」

とつぶやきオーバーブーストをふかし去っていくのを見て

敵ネクスト、赤色のアリーのパイロットは

「おい！なに逃げようとしてんだよ！？」

というと右手に持っている04-MARVEをレイヴンのACに向けて発砲しようとした瞬間に鈍い発射音と共に横からグレネードが

打ち込まれた

「ああ！？てめえなにしゃがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした

「ふっ、エリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言う

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ屑が！！おいベルリーズ、アンジエてめえらはこいつとさっき逃げた奴には手を出すなよ！俺が始末してやるっ」

と言うと二人からは「好きにしろ」との言葉が返ってきた

（これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？）

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！」

その言葉と同時に04・MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃げた

「おい！さっきの威勢はどうした？逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対してレイジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとはくだらないな、レーザーソードでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言ったことを後悔するなよ？お前のACの四肢を切って最後にじっくりコアを焼ききってやるよ！！」

そついうと彼は右手から04・MARVEをすてて左手の02・D RAGONS LAYERだけとなった

（下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？それともAMS適正で頭のネジが吹っ飛んだか？どちらにしてもこちらにチャンスはできたわけだ）

そう思うとレイジは右背のグレネードをパージして相手の目の前に  
でた

「やっと観念したか屑野郎めが」

そっついこちらに向かつて突っ込んでくる赤いアリーヤそれに向か  
い左背のグレネードを下半身に撃ち込む

するとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにP A フライバルアーマーなどがあっても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に  
硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージ  
オーバードフーストしてOBをふかし相手に向かつて突っ込む

すると敵も一時的な硬直が終わり再び左手の02 - DRAGONS  
LAYERを振るった

だが02 - DRAGONS LAYERが直撃することは無かった、  
なぜならば02 - DRAGONS LAYERはほかのレーザーブ  
レードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握でき  
てない三流リンクスが振るったところで一撃必殺にはならなかった。  
だがレイジの乗るACの頭部に掠ってしまい頭部が吹き飛んだがレ  
イジはとまらずに

「おおおおおおおおおおお!!」

と叫び相手のアリーヤのコアに右腕部のNIOHを撃ち込むと

「ガアアああアアああアああ!!」

と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しん  
でいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにNIOHを3回撃ち込むと  
赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

(これでもう戦ったための武装は無いな、だがレイヴンが逃げるこ

ができるぐらいの時間は稼げただろう」

そう思うとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももうレイヴンの時間稼ぎをまだ行つかのように立っていた

それをみたベルリオーズは

「なるほど、そんなになつてまで仲間を助けようとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな  
なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いいや、死ぬのは怖いさ、そしてなんもなく無意味に死んでいく  
のはもつと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていないの  
とあまり変わらないと俺は思っている」

と今にも気を失いそうな自分の体に鞭を打ちそうこたえた。すると  
アンジエが

「ならばなぜ今このときも逃げようとしない？充分にあのACが逃  
げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと  
思っただけさ」

その後、まあ生きることが勝利なら俺はもう負け確定だけどな  
と加えて言った

それを聞いたベルリオーズは

「ほう、いい戦士だ。お前にもう一度チャンスをやろう」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからずに自分の意識を手放  
したのであった



## 第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジエ、4の主人公はこんなじゃねえ！  
と思われるかも知れませんがそこら辺はつつこまないでくれるとあ  
りがたいです（・・・）

そして次も頑張りたいと思います

### 第3話（前書き）

えゝ前回の話でネクストに勝ってますがそこら辺はご都合主義という形で保管してもらえとうれしいです（汗

そして今回も微妙なですけど是非読んでください

### 第3話

#### 第3話

「知らない天井だ・・・」

と言うと最初に目に入ったのは白い天井である

（俺はあの後、死んだのか？）

そう思っていると病院で嗅ぐ様な薬品の臭いが鼻を通ってきて、ぼやけた意識を覚醒させていく

（ここは天国じゃないと病院か？）

そう考えると体を起こし周りをみると自分の体に点滴やら医療用のチューブなどが繋がっているのを見る

（まさか気を失っている間に“ナニカサレタヨウダ”ってことになったのか！？）

などと考えていると見知らぬ男が入ってきた

「どうやらやっと目が覚めたらしいな」

と聞き覚えのある声

「あんたはまさかあの新型ACに乗っていた人か？」

（もし、そうならこいつの名は

「そうだ、私の名は

“ベルリオース”

だ。おぼえておいてくれ」

「ああ、それよりどうして俺は助けられたんだ？」

「ふむ、興味がわいたと言ったほうがいいのか？」

「興味がわいただけで助けるのか？まあ、助けてくれたことには感謝する。それとあのとき最後になんか言ってたがどういう意味だ？」

「言葉のとおりだ。お前にもう一度チャンスをやる、自分が生きた証を立てることができる、すなわち、もう一度戦場に立つチャンスをやると言っただ。」

「あんたはなぜそこまでしてくれるんだ？それこそあんたが言っていたように他人からみて無意味な行為など言われんじゃないのか？」  
「そうかもしれないな。まあ個人的にだが、よい戦士だと思っただ、見てみたくなっただのさ」

なにをとは言わなかったがそれはレイジもなんとなく“それ”を理解したのだ

「そうか、そういえば外の状況はどうなっているんだ？」

「ああ、それならすでに企業側が圧倒的な勝利を収めて終わった」

とベルリオーズの言葉を扉から入ってきた女性がさえぎり、口にした。するとレイジは

「あの後、たった一日でか！？」

（いくらネクストが圧倒的に優れているといえ一日ですべてを潰したのか！？）

と驚愕の表情をし聞いてくると

「一日？なにを言ってるんだ？すでに一週間と数日はたっているぞ。」

と呆れたように答える女性

「俺は一週間以上も眠ってたのか！？」

とまたも驚愕の表情で聞いてくるレイジ。それを聞くと女性は

「まったくいちいちうるさい奴だ、いいかよく聞け、お前は私たちと戦った後なぜか知らんがそこにいるベルリオーズに助けてもらいこの療養施設に運ばれて、お前が眠っている間に企業側が圧倒的な勝利を収めて戦争は終わった。そして今日お前が目覚めたというわけだ。まったくなんでこんな奴を助けたんだ・・・」

と呆れたように肩をすくめて言う女性の言葉に対してベルリオーズは「よい戦士だと思っただ、興味がわいたんだ。そういう君もまっ

たく興味がないわけではないだろう？」

そう言われると女性性は「ふん」と言いそっぽを向いてしまった

「そついえば彼女の名を言っただけでなかったな、彼女は「アンジェだ」・

・それとまだ、お前の名前を聞いていなかったな」

「ああ、言っただけを忘れていてすまない、俺の名はレイジだ。もう一度言わせて貰うが助けてくれたこと、感謝する」

と言うとレイジは軽く頭を下げた

「なに、あまり気にするな。そしてさっきお前にチャンスをやると言っただけについてだが、AMSを移植してもらった方がいいな？」

と聞くとレイジは

「どのみちそうでもしなきゃこの先、戦場では生きていけないんだろ？移植するなら今からでも俺はかまわん」

と笑って返した

「理解が早くて助かる。ならば私についてきてくれ」

と言うとベルリオーズが部屋を出て行き、レイジはそのあとについていった

あれから俺はAMS移植手術をして数ヶ月後、はれてリンクスとなっていた

そしてレイジは助けてもらった恩を返すために2年程レイレナー社のリンクスとして動くことになった

因みにレイジのAMS適正は下の上、良く言えば中の下という微妙なものである

（どうやら神様は俺に厳しいらしいな・・・ん？でも確か、AC4の主人公のAMS適正は最悪だったよな、ならうじうじ文句は言っられないか）

と思い今日もまたシュミレーターでネクストを動かし、少し休憩している

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」とアンジエが言ってきたのだ

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と自嘲気味に返した

「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

「そうだな、よろしく頼むよ」

そう言い再びシュミレーターに乗り込んだ

アンジエ side

彼女は今日、珍しく、数ヶ月前に新しくリンクスになったレイジのシュミレーターの成績を見ている

正直、彼は彼女が思っているよりも成長の度合いが早かった。

（あいつのAMS適正は下の上であり低いほうだったな、なのにこれだけの成長速度・・・いや、むしろ早すぎるぐらいか）

と思っているとレイジがシュミレーターからでてきて近くのいすに座った

（ふむ、試してみるか・・・）

そう思い彼が座っているほうに歩いていき

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」と言うレイジは

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と付け加えて自嘲気味に返してきた「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

と彼女はシュミレーターに指をさしながらレイジに言う

「そうだな、よろしく頼むよ」

と言いは再びシュミレーターのほうに歩き出し乗り込んだ。それを見て彼女は

(ふっ、これまでの力、試させる手もらっぞ)

と思いもう一台のシュミレーターのほうに歩き始めた

side out

シュミレーター内の仮想空間の戦場

そこにはアンジェが乗るネクスト・オルレアとレイジが乗るネクスト・アノーニモがいる

オレルアの武装は左腕武装に01 - HITMAN 右背武装にSULTAN 肩に09 - FLICKER そしてなによりも彼女の代名詞と言っているほどの特徴のある右腕武装“07 - MOONLIGHT”である彼女の振るう剣は誰よりも美しく、勇ましいものであり剣姫と言う名がふさわしく思えるものである

それに対してアノーニモの武装は右腕武装に03 - MOTORCOBRA 左腕武装に04 - MARVE 左背武装にTRESOR  
というなんとも特徴の無いアセンになっている

そして二人のコクピットに開始の合図がでる

すると先に仕掛けたのはアンジェの乗るオルレアである

真っ先に肩の09 - FLICKERを撃つと同時に07 - MOONLIGHTで切りかかってくる

レイジはとつさに左にQBでよけるが07 - MOONLIGHTが  
少しかすりPAをこつそりと削られる

そしてレイジはすかさずQBを使い多少距離をとるとQTで体勢を

立て直し左手の04 - MARVEをまだこちらに向ききっていない  
アンジエに対して（もらった！）そう思い撃つ

しかしその行動を予めよんでいたかのようにQBで難なく避けたのだ  
だがレイジもすぐさまにQBを使い、アンジエに張り付くように移動し、右手の03 - MOTORCOBRAと左手の04 - MARVEを撃つ

それに対してアンジエも左手の01 - HITMANで撃ち返しながら  
右手の07 - MOONLIGHTで切り裂こうとどんどん近づいてくる

レイジも相手の必殺の間合いに入らぬようにQBを使い均衡を保っていた

しかしすぐさまその均衡をやぶったのはアンジエであった、アンジエはレイジの一瞬の隙をみて二段QBで一気に詰め寄り右手の07 - MOONLIGHTを振るった・・・が完全には切り裂いていなかったレイジの突発的な二連QBでなんとか致命傷を避けたのだ  
（ほう、今のは完全に決まったとおもったんだがな、にしてもなかなか当ててくるじゃないか。なら次は強引にいかせてもらおう！）

そう思いながらアンジエは攻撃の手を休めずにいた。そしてレイジは（危なかった、何とか致命傷にはならなかったがAPとPAをこつアーマーポイントそり持つてかれたな、にしてもさっきから攻撃がどんどん鋭くなっているな・・・しかたないここは賭けに出るか）

と考え左手の武器を背中のTRESSORに切り替えアンジエに向かいQBをすると

アンジエは好機と考えレイジに向かい07 - MOONLIGHTで切りかかった

するとレイジは07 - MOONLIGHTがあたる直前でTRESSORを撃つと同時に右にQBをしたが避けきれず07 - MOONLIGHTがほぼ直撃してしまったのだ、するとアノ二モのAPは0となりLOSEと言う文字がレイジのシュミレーターに浮かび上がった

（やっぱりかー！）

と思いレイジはシュミレーターをでた

アンジエ side

（最後のあいつの一発もし直撃していたら私は負けていたかもな。  
強いな・・・この先が楽しみだ）

と心の中で言うと彼女は自分でも気づかぬうちに笑っていた

（やはりベルリオーズの見込んだとおりかもな、よい戦士になりそう  
うだ）

そう思いシュミレーターからでた

side out

アンジエがシュミレーターからでるとレイジは

「やっぱりアンジエは強いな、勝てんな」

「ふっ、お前も予想より強くなっただじゃないか」  
と珍しくレイジのことを褒めたのだ

「そうか、ありがとう。だが次は勝てるようになってやるさ」

「よく言う、簡単には勝たせやしないさ」

そう言うアンジエはシュミレータールームを去っていく  
そして扉をでると

「君が褒めるなんて珍しいな。いいことでもあったのか？」

と聞くベルリオーズに対して

「そうか？まあ、あいつはお前の言ったとおり、よい戦士になるかも  
な」

そう言う彼女は廊下を歩いていった  
するとベルリオースは彼女の言葉に対して「ほう」と言うとシュミ  
レータールームに入っていた

そしてこのあとレイジはリンクスNo.29をもらい  
シュミレーターでベルリオースにぼこぼこにされるのであった

### 第3話（後書き）

相変わらずベルリオーズやアンジェはこんなじゃねえ！と思われ  
ますよね・・・orz

あとリンクスNo.29ですが実際はAC4開始前に倒されている  
らしいんですがそこら辺は少し独自設定的なものを入れさせてもら  
いました

次も頑張つて書きたいと思います

早く時間を進めたい・・・

#### 第4話（前書き）

えゝ、今回も無駄に長いし駄文です

いろいろとキャラが安定してなく読みづらいと思いますが、すみません（汗

そして、IS出てこないやん！と思われる方もいらっしゃると思いますが

ISの世界に転生するのはもう少し先になりました

一応今週中にはISの世界にいくつもりでありますのでどうか温かい目で見守ってくださいm（――；）m

## 第4話

### 第4話

レイジ side

「リンクス、お疲れ様です。そちらに輸送用のトレーラーを回しますので、それに乗り帰還してください」

「言いオペレーターからの通信が切れるとPAをきり、肩の力を抜くと今までのことを少し思い出していた」

昔は戦場なんてものはアニメや漫画、ゲームでしかありえないと思っていたのに自分が今この場にいること馴染んできているのが非常に不思議に感じる。今でも夢を見ているんじゃないかと思うくらいだ、最初のミッションであの地獄絵図を見たときガタガタ震えて嘔吐をしてしまっていたのに今ではその地獄絵図の状態で敵の兵士などが命乞いをしても躊躇わずに引き金を引けるほどまでに自身の心は変わってしまったていると考えると複雑な気持ちになる。

アニメや漫画、ゲームの戦争の殆どは主人公達がいてその主人公達と敵対するものがほぼ必ずと言っていいほど世界を混乱に陥れるためにだの言い主人公達のほうに必ず大義名分があるようになっており、しかも事情があったり、悪に利用されて戦っている人達や事情を知った主人公達はその人達を殺さないで事情を解決したり悪を倒してハッピーエンドとなるようになっていく。

だが実際の戦場と言うものはそんなものではない。戦うものにはそれぞれの思惑があり片方が絶対的な悪というのは存在しないのである。

る。誰かが正義と知っていることは他の誰かからみれば悪になるかもしれないのだ。そして戦場<sup>いくさ</sup>では一瞬でも引き金を引くことを躊躇えばその先に待つのは“死”というものだ。例え相手が家族を人質にとられて戦うしかないとしてもだ。そういう悲劇的な相手に対しても命を奪う非常さがなければ生きていくことは難しいのだ。

そう考えている間に遠くに輸送用のトレーラーが見えてきてレイジは考えることをやめて帰還の準備をした。

s i d e   o u t

そしてレイジは輸送用トレーラーで近くのコロニーに帰ってきて町を歩いていると大きな荷物を必死に持っている少女がいた、見ていると今にも転びそうでもとも危なっかしい様子である。

（ふむ、手伝ってやるべきか？だがいきなり見ず知らずの他人が手助けしようとしても、不審者にしか見られないからなあ）

そう考えていると少女がとうとう転んでしまい中にあるものをばら撒けてしまい近くにいた軍隊のような服装をした男達3人ほどの集団に当たってしまったのだ。

すると少女は

「ご、ごめんなさい！」

と慌てて誤る。しかし男は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と因縁をつけてきたのだ。だが少女は必死に謝ることしかできない

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！  
ともう一度謝るが

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

と、さらに怒鳴りつける

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけ許してもらえと思ってんのか？」

と他の男が言いそれに続きさっきの男が

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

そうは言っても子供が10万などという大金を持っているはずがなく払えるはずがないのだ。しかし男達は無理に要求してくる

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに催促してくる

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」

なみだ目になりながらも必死に訴えてる少女。

「へえ〜」

と言いながらその少女をなめまわすように見ると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話しないとね」

と言うと強引に少女の手を引き路地裏の暗いほうへ連れて行くところ。少女は助けを周りに求めるが通行人は見てみぬふりであるまあ軍人みたいな相手だと自分の身がかわいくて誰も助けることはしないだろう

（なんつつか、アニメや漫画でありそうな光景を目の当たりにするとは思わなかったが、まあ俺も流石に子供を見てみぬふりをするほど腐っちゃいないからな、全く面倒なことになった・・・）  
そう言うとも男達がいるほうへ歩いていった

今日は、おつかいに来ました。そして今日のおつかいはいつもより荷物がいっぱいでも大変です。だけどほかの子のみんなのためにいっしょうけんめい運んでいます。するとつまづいてしまい途中で転んでしまいました、やっぱり一人で来ないでお姉ちゃんに手伝ってもらえばよかったなと少し後悔しました。

わたしは急いで散らばった荷物を拾おうとしました、すると男の人たちがこちらをにらんでいます。わたしはおそろおそろ男の人たちを見ましたすると荷物の中にあつたジャムが男の人たちの中の一歩背が高い人の靴にかかってしまっているのを見てあわてて

「ご、ごめんなさい！」

と急いで謝ります、ですが男の人は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちまったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と怒鳴られてしまいました。わたしは必死に謝ります

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！」  
ですが男の人は

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

とさらに怒鳴りつけてきます。すると

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけで許してもらええると思ってるのか？」

と二番目に背が高い男の人が言ってきました。どうしよう、偉い人なのにと必死に考えてると

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

とさっきの男の人から弁償をしろと言われます。そんなこと言われなくてもそんな大金は持っていないです。ですが男の人は

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに言ってきました。ですがわたしは孤児でたとえ孤児院に帰ってもらってくることもなくてできません

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」  
と、わたしは泣きそうになるのを必死にこらえ言いましたすると男の人は

「へえ」

と言うと私のことを気持ち悪い目でじつと見てきます。すると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話しないかね」

と言うとわたしの腕をつかみどこかに連れて行くこうとしてきます。わたしは必死に抵抗しましたが大人の力には勝てず、どんどん引きずられていきます。わたしは必死に周りの人に助けを求めますが周りの人たちはみんなこちらをチラツとみるとすぐにどこかに行ってしまう。わたしを助けてくれる人が誰もいないのだと、そう思うと今まで抵抗してた自分の力がゆるみもう駄目だなと思うと

「おい、下衆どもその手をさつさと放してとつと消えうせろ」

と黒い髪に黒いコートを羽織った男の人が言いました。するとわたしをつかんでいた男の人が

「なんだ、てめえ？お前は関係ないだろすつこんでろ！」

と怒鳴りました。すると黒い男の人は

「さっきの会話からするにたかが10万払えばいいのだろう？」

と言うと財布のなかからお金をわたしをつかんでいる男の人にむかって放り投げました。すると

「さっき払えなかったから利子がついて合計100万払えば許してやるよ！なんせ俺は偉いからなあ！」

と笑いながら無茶な要求をしてきました。すると黒い男の人が

「そうか、貴様は自分が偉いとか思ってるのか？やれやれ、とうとう脳みそまでもカビたか・・・」

と言うとわたしをつかんでいた男の人が急に黒い人に向かって殴りかかりました。わたしは思わず目をつぶってしまい。鈍い音がして、おそろおそろ目を開けると殴りかかった男の人がおなかの辺りを必死に押さえてうずくまっています。すると二番目に背の高い人が

「おい、てめえこの人はリンクスだぞ！てえだしてただですむと思  
つてんのか？」

わたしは、それを聞いて、とてもあせりました。リンクスという人  
は戦場で戦うとても強い人だと聞いたことがあります。そんな人に  
手を出して大丈夫なんでしょうか・・・

「ほう、そいつはリンクスカ、笑わせる。俺もリンクスだがそいつ  
のような奴は見たことが無いんだがな、因みに俺のリンクスNo.  
は29なんだがな」

そう言うのと二番目に背の高い人は顔を真っ青にして

「ほ、本物のリンクス」

と言うとうずくまってる男の人ともう一人の男の人と一緒に急いで  
遠くに行ってしまうました。そして黒い人はこちらのほうを向くと  
近づいてきました。そして黒い人はわたしの頭に手をのせると

「大丈夫か？よく我慢したな」

と言いました。するとわたしは急に涙がでてきて泣いてしまいました  
ず黒い人に抱きつき声を上げて泣いてしまいました。すると黒い人は  
「もう怖くないから安心しろ」

と言いわたしをそつと抱きしめてくれました。黒い人は外見は真っ  
黒だけど絵本に出てくるような白馬の王子様のようにみえました。

s i d e   o u t

あのあと少女は多少落ち着いたらしく泣き止んだ

「どうだ？もう大丈夫か？」

「は、はい。その、さっきは助けてありがとうございます！」

「なに、気にするな。そついやお譲ちゃん、買い物をしてたみたいだが大丈夫か？」

「あ！どうしよう・・・」と言うと少女は俯き肩を沈める

「ふむ、買うものはまだ憶えてるか？」

突然の発言に少女はビクリし

「ふえっ？」と素っ頓狂な声を発してしまった。そして

「はい、一応憶えています・・・」そう答えると

「そつか、これも何かの縁だしな。俺が代わりに買ってやるよ」

「で、でも助けてもらつたうえにそこまでしてもらつのは・・・」

と、ためらう少女

「だけどまた親御さんにお金をもらいにいくのも大変じゃないか？」

「あ、えっと、その、わたし孤児院に住んでいて、親がいないんです・・・」

と少女はだんだんと声を小さくしながら言つのを聞くと

（やってしまた・・・あまりにもデリカシーの無いことをしてしまった・・・）

そう思い、レイジはどうにかしようと考え

「じゃあ、俺が君の住んでいる孤児院にお金を寄付するということでもいいね」と言うが

「で、でもそれは、」とまだ言おうとするのに対して少女の頬を軽く引つ張り言葉をさえぎると

「まあ、いきなりあつた見ず知らずの人を信用しろと言うのなんだが、もうちよつと年上の人を頼つていいんじゃないか？」

と優しく語り掛けると少女は小さく　こくんと頷くとレイジは頬から手を放し

「やはり、子供は素直が一番だ」と言い笑つた。すると少女は手に軽く力をいれ

「あ、あの！わたしは、リ、リリウムといいます！お、お兄さんの名前を教えてください！」と力強く聞いてきた

「そついや、言つてなかったな。俺はレイジ・クゼだ、よろしくな」

そう言うとき席を立ちリリウムという少女と買い物をしてにかけた

そして買い物の途中

「そういえば、レイジさん、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、全然問題ないな。リンクスは高給取りだからな」

「リンクスですか、その、怖くないんですか？戦うことが・・・」

「怖いといえば怖いかな・・・けど、もう慣れてきてしまったかな？それに、もうこれしか生き方が無いからな」

「で、でも他のお仕事だって頑張ればみつけれらんじゃ」

「まあ、できないことも無いだろうが、戦うことしかしてきてないからな、他の仕事につくのは難しいだろうな」

（レイジさん、なんかとても寂しそうな目をしてる）とリリウムが思っている

「ほら、こんなくらい話はやめよう！子供には関係ない話だ。」

と言いつつリリウムの頭をわしゃわしゃとなで「ふむ、綺麗な髪の毛しているな」と言う

「孤児院のお姉ちゃんがいつも丁寧にとかしたりしてくれるんです！」と嬉しげに話す。するとリリウムはふと足を止めとある商品棚に置いてある百合の花の髪留めを見ていた。それを見てレイジは

「どうした、それが欲しいのか？」と聞くと

「い、いや、とても、綺麗だなと思って」

「ん？欲しくないのか？」

「そ、それは・・・ほ、欲しいですけど・・・」とごにょにごにょと答えるリリウム

「よし、俺からのプレゼントだ、買ってやる」

「い、いえ大丈夫です！そこまでしてもらうのは」といつつもやはり欲しそうに少し目を輝かせている

「遠慮するな、リリウムも女の子だ小さいころから髪留めの一つや二つみにつけないと将来もてないぞ」

といい髪留めを買いリリウムに渡すと、とても満面の笑みだった。

そして残りの買い物も無事に終わりリリウムを孤児院に送っていくと去り際に「縁があつたらまた会おう」と言いレイジも帰ることにした

そしてそれから数ヶ月後レイレナード社にレイジは来ていた

（ベルリオーズと呼ばれたが、どうしたんだ？二年間だけといったがそのあとも一応、レイレナードのリンクスとしているからな・・・）

と考えているとレイジが待っていた部屋の扉が開きベルリオーズが入ってきた、すると・・・

「世界を私たちとともに変えないか？」

#### 第4話（後書き）

今回もびみようでした・・・

そしてリリウム登場させてみましたが、正直、無くてもいいんじゃない？って感じですが作者があまりにもリリウムたんと、きやつきやつ、うふふって感じのを書きたいがため頭の中の妄想を垂れ流しました（  
；；；

そして次から一気に時間を進めていきどうにか今週中にはISの世界にいけるよう努力いたしますのでよろしくお願いしますm（  
| ; ) m

## 第5話（前書き）

え、いつの間にか5000PVと1000ユニークを超えてました！

皆さん読んでいただき、本当にありがとうございます！

評価してくださったり感想を書いていただいた方にとっても感謝感激です。

自分は小説を初めて書く身なのでとても嬉しいです。

今回の話で時間をかなり進めました。

なので予定通り今週中にはISの世界に入ることができそうです。

そして後書きのほうにアンケートみたいなものをしておりますので是非ご協力をお願いします。

## 第5話

### 第5話

約三ヶ月前、G Aにコロニーアナトリアから傭兵が売り込まれたそう、リンクス戦争へのカウントダウンの始まりだ。

アナトリアの傭兵は次々と戦火をあげ、さらに、マグリブ解放戦線の出来事により瞬く間にその存在が知れ渡ったのだ。

そして約一週間前に、G Aグループ内である事件が発生することになる。G A Eが秘密裏にアクアビットと提携しG Aグループを離脱するという事件だ。そして、そのことがわかったG AグループはG A Eに対して、アナトリアの傭兵に粛清の意味を込めて“ハイダ工廠”で開発中の巨大兵器もろとも破壊したのだ。このことにより今まで水面下で対立していた企業間の争いが表面上に浮き出てきたのだ。

そして先ほど

「世界を私たちとともに変えないか？」

とのベルリオーズからの突然の申し出にレイジは驚きを隠せないでいた。

「なぜ・・・俺なんだ？」

「あれから、お前を見てきたが、私の予想通り、いやそれ以上によい戦士になっている。だからお前の力を借りたいと思ったのだ。」

そう言うベルリオーズに対してレイジは

「それは買いかぶりすぎだ、ベルリオーズ、俺なんかよりいい戦士は他にいるだろう？俺はあんたの言うような、よい戦士でもなんでもないただのリンクスさ、だからせつかくのお誘い悪いが、断らせ

てもらう・・・すまない。」

レイジは唇を噛み本当に申し訳なさそうにベルリオーズに告げる。  
だがベルリオーズは

「そうか、やはりな。お前ならそう言うと思ってたぞ」

と言うベルリオーズの言葉を聞き

「なっ、あんたは俺が断ることわかっていたのか？」

「まあな、だが本当にお前のことはよい戦士だと思っているぞ。まあ、返事が変わることがあれば私に連絡してくれ」

ベルリオーズはそう言うのと静かに笑うと部屋を出て行った

するとレイジは「本当にすまない・・・だが、あんたの“答え”は俺がしっかりとみとけてやる」

と誰もいない部屋で言った

ベルリオーズ side

やはりレイジは、自身のことを過小評価しすぎだな、己を過小評価しすぎると自滅してしまうからな。だが私の思った通りだな。まあ、あいつが加わらないことは残念に思えるが。たとえあいつがいなくても私たちが世界を変えてみせる。

ふっ、それにしても私の“答え”を見届けるか、やはりよい戦士だ。

side out

そしてリンクス戦争は、次第に拡大していった。そして数カ月後、レイレナード本社はアナトリアの傭兵により壊滅し、アクアビット社はジョシユア・オブライエンの襲撃により壊滅。こうして主戦力たる二社が壊滅に陥りインテリオルグループは停戦を提議し、リン

クス戦争は幕を閉じたのだった。しかしこの戦争により企業はかつてないほどに消耗し、無秩序に地上のコジマ汚染はいつきに拡大し、多くのコロニーが消滅した。

それにより、人々は汚染された地上を捨て、人類の過半数は清浄な空でクレイドルと呼ばれる巨大プラットホームで生活をするようになった。

一方で国家解体戦争で企業が支配体制を確立した原動力アーマド・コア“ネクスト”と、その搭乗者“リンクス”その圧倒的な力の個体依存性に危機感を抱いた企業により、企業機構“カライド”管下の傭兵として地上に残されることとなる。

今や、企業軍の主力はアームズ・フォートであり、かつて戦場を支配したネクストたちは、この薄汚れた地上で延々と続けられる経済戦争の尖兵と成り果てていたのだ。

そして、リンクス戦争が終結してから約二年後  
あの後レイレナードの多くの者達がオーメルサイエンス社に取り込まれていき、レイジもその中の一人であった・・・

「リンクス、実験を開始します」と通信がはいり  
「了解」そう短く応えたとレイジは、ヴァンガード・オーバーボード・ブーストVOBがネクストにちゃんと接続されているかを確認しOBのスイッチを入れるすると次第に加速していきある程度加速するとVOBが点火しいつきに超加速をする。

レイジは、超加速によるGに耐えながらVOBの数値を確認していく、すると突然コクピットから警告音が鳴り響く。それはVOBに異常が発生しているという警告音だった。

(やはりな・・・)

とレイジは冷静に思う。それもそのはずだ。

レイジはもとはレイレナードの出身、リンクス戦争に敗退しオーメルに取り込まれたのはいいが、オーメルからみれば自分達がレイレナードを潰したようなものだ、もしかしたら復讐されるかもしれない。だがレイジは今までオーメルの新兵器の実験などになんもなく普通に受けていた。そう、別にレイジは復讐しようだのなんだのは全く思っていない、ただ実験の依頼が来たからそれをこなすというにしか考えていなかった。だが逆に、なにもしなすぎたのがオーメルから見れば不安だったのだ、以前はベルリオーズなどと一緒にいることが多かったので、実は何か企んでるのではと思い、事故を装いレイジを抹殺することに決めたのだ。

（俺は、こんなところで死ぬのか。今までの行いからみれば、まあ、当然か・・・）

と頭で自身の死を思っているても本能は生きようと必死にVOBのパージをしようとしている。考えていることは全く別の行動をとる体に対して思わず笑ってしまう。

（ふっ、そうだったな・・・俺はどんなに醜くても生きようとする奴だったな。なら足掻いてみるか）

そう思いどうにかVOBをはずそうと必死に操作する。やっこの思いでVOBをはずすことに成功したがその直後、VOBが爆発を起こしその爆発に巻き込まれる。するとレイジの乗るネクストはボロボロになり落下する。そして中のレイジも爆発の衝撃が凄まじくそのダメージを受けていた

「がはっ！ははっ、やっぱりこうなる運命なのかね・・・まったく、ついて、ない、な・・・」

吐血し、そう言うとレイジは意識を手放した

とある扇動家 side

私は今日、とある企業の実験場に来ている。

（やはりな、彼のことを事故を装い抹殺しにかかったか。ふむ、企業としては正しい判断だな。企業の人間の9割は彼が死んだと思っているだろう。だが彼はおそらくだが生きているだろ。まあ、こちらには都合がいい。さて、あの人がいよいよ戦士と認めた人物だ、接触を試みるか・・・）

そう思うと、とある扇動家は移動し始めた・・・

side out

レイジはふと目が覚めると目に映るのは白い天井である

「知らない天井だ・・・」

（あれ？なんかこんな状況前にも経験が・・・）

そう思っているとドアが開き、そちらのほうに顔を向けると一人の青年が立っていた

「どうやら目が覚めたみたいだな」

「お前が助けたのか？」

（どっかで見たことある顔だな？どこだったかな・・・そしてどことなく雰囲気がいっしょにしているしな、こいつもしかして・・・）

「ああ、そのとおりだ。まず名前を伺ってもいいか？」

「名はレイジだ、お前の名は？」

「私の名は“マクシミリアン・テルミドール”だ」

「お前、もしかして昔、何回かベルリオーズと一緒にいたことある奴だろ？」

「なんだ知っていたのか」

（やはりな、レイレナード時代にたまにベルリオーズと一緒にいるところを見たことがあるしな）

「いや、思い出したただだ。で、わざわざ助けたからには何か用があるんだろ？」

「まあ、用はあるが、まず先に話をしてみたくてな」

「話？俺なんかにか？」

「ああ、あの人が高く評価していたから気になってな」

「あいつは俺のことを高く評価していたが、実際そんないそうな人間じゃないさ」

（ふむ、聞いたとおり自身のことを過小評価しすぎているな）

「まあ、絶対にありえないが、俺が加わって戦況が変化するほどのものだったら、俺は、あいつの誘いを断り、見殺しをしたようなもんなんだぞ？」

「戦況が変わるかはわからないとして、見殺しにたと言うのは少し違うのではないか？あの人から聞いたぞ、あなたが断ったのを聞いて部屋をでたあと“答え”を見届けると言ったらしいじゃないか。確かに他の人間からすれば見殺しにしたのと同じになるだろうだが少なくとも私は、そうは思わない」

レイジは今回の実験も自分が事故に装い殺されるであろうと、わかっていてもそれは自身の贖罪だと思いつけ入れようとしていた。もしあのときベルリオーズの手をとっていたら、ベルリオーズやアンジエ、友と呼べる者が死なずに違う未来が訪れたかもしれない。だが自身はそれを拒んでしまった。そして友と呼べる者達が死に、気づいたときには遅かった。“答え”を見届けると言っても他人から見ればしょせんは自己満足の贖罪なのである。だが目の前の男はそ

のことも理解したうえでレイジの行動を否定せずにいてくれた。もしかしたら利用するために言ってるのかもしれない。だが、そのことがレイジにとってどこか救われるような気がしたのであった。するとレイジは「ありがとう」と静かに呟いた

「感謝される覚えはないんだがな、受け取っておこう。」

（ベルリオーズ、やはり彼は、あなたの見込んだとおりかもしれない）

「ふむ、話はこれぐらいにして。本題に入っていいか？」

「ああ、かまわない」

「まず私たちがやるうとしていることはクレイドルの前提を覆す明確な反逆行為だそれを理解したうえで聞いてくれ。」

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ。

それをよしとしないのであれば、是非、私たちと共に世界を変えないか？」

「ふつ、いいだろう。こんな奴でよければ、仲間になる。」

「そういい不適に笑ってみせる」

「じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？」

「そのことだが、もう一度、カレードに特定の企業に深く関わらないリンクス、つまり独立傭兵として加わり行動してもらう方がいいか？」

「かまわないが、大丈夫なのか？俺は一度、殺されそうになった人間だぞ？そんなやつがまた表舞台にたったら面倒なことになるんじゃない？」

「やないか？」

「大丈夫だ。そのことも折り込み済みで君にはもう一度、表舞台に立ってもらう。まあ、死んだことになってるから名前などは変えてもらうことになるかな」

「わかった」

「では、新たな名前を決めてくれ。そうすれば私のほうで手をまわしておこう」

（名前か・・・ふむ、少し皮肉にをいれてみようか、ならば・・・）  
「きめたぞ、新たな名は“ジョン・ドウ”だネクストのほうは“ネームレス・ワン”で頼む」

「“ジョン・ドウ”と“ネームレス・ワン”か・・・ふっ、ずいぶんと意味ありげな名前だな」

「そうだろう？では、これから俺のことはジョン・ドウ、略してジャックとよんでくれ」

「そうか、よろしく頼む。ジャック」

そして、この日からレイジは新たな名、ジョン・ドウとなりORCA旅団に加わったのだ

## 第5話（後書き）

一応、この後は首輪付きは首輪付きで出します

そしてアンケートみたいなものですが、ISの世界に転生させる人で主人公とリリウムを入れる予定でいます

その他に首輪付きも入れようかと思っているんですが

入れてもありじゃないか？と思われる方は 1 で

首輪付きを入れるなんて絶対に許さない！みたいな方は 2 で

感想の一言のほうにお願いします。

締め切りは一応土曜の昼の12時までとしますのでご協力お願いします。  
m ( \_ \_ \_ ) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

---

IS 何回か転生(?)する人の物語

2011年11月24日20時45分発行